こころは自分に言い聞かせて、ミットを構えた。

しかし、なかなか安定した捕球ができない。何回も捕球ミスを繰り返した。体中に汗が噴き出ている。ぽたぽたとあごの先からしたたった汗が、土を黒く染めた。

「おまえなっ」

マウンド上の哲平が、いらいらと土をけった。

「いいかげんにしろっ。試合だったら、もう何人も振り逃げされてるぞっ」

こころは唇をかんだ。哲平に浴びせられた言葉に対する悔しさもあったが、それ以上に、さっきまで捕れていたのに、空振りされただけで捕れなくなってしまっている自分が腹立たしかった。打者のいない試合なんてない。打者が空振りした球をきちんと捕球できなければ、三振を取ることもできない。試合に出るなんて無理だ。

「哲平、頭冷やせっ」

堂島さんが、言った。

哲平は堂島さんの言葉に、「ちっ」と、舌打ちしたが、下を向いて息を深く吐いた。

「あいつの悪いくせだ。すぐ、かっかする」

だぞ」

堂島さんが厳しい口調で言って、哲平を見た。

「ああ……、はい」

堂島さんの気迫に押されて、哲平はうつむいた。

「あと一人、がっちり抑えていこう」

堂島さんはそう言うと、松葉杖をついてベンチに帰って行った。

哲平とこころは、それぞれのポジションに戻った。

五人目の打者が入った。バッターボックスに入るときに、打者はちらりとこころの目を見た。それから、バントの構えをとった。

（え、これ、バントするってこと？）

こころは、マスクの中で目を見開いた。バントされたら、すぐに打球を捕って、一塁に送球しなければならない。何度か練習したが、うまくできるだろうか。

（キャッチャーの私をねらってるんだ）

キャッチャーが初心者だってことを、相手はもう見抜いたのか。バント戦法でバッテリ

この球だ。こころがキャッチャーになってから、哲平はこの球を投げられなくて、いらいらしていたのかもしれない。全力で投げたい――その思いを募らせていたんだ。

「ナイスボールッ。もういっちょうっ」

こころは張りのある声で叫んで、哲平に球を投げ返した。

哲平が、ぐっとうなずく。

「くそっ、こいっ」

佐々木が手のひらにペッとつばを飛ばして、バットを構えた。

落ち着いた動作から、哲平が第二球を投げ込んできた。

ズバーンッ。

佐々木は空振りして、体勢を崩した。

（捕れた）

こころは、ミットからつかみ出した球を、見つめた。佐々木の空振りは見えていたが、自分に向かって走ってくる球だけに集中していた。球の威力はこれまで以上なのに、これまで感じていた不安や恐怖心が薄らいでいるのに気づいた。不思議だった。